11
学図
小国523

文部省検定済教科書
財団法人 教育図書研究会編修

教育学部
資料室

五年生の
国語
下

KC
G16

学校図書株式会社発行

60326
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49748

中央図書館
広島大学図書
0130449748

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1950
0130449748

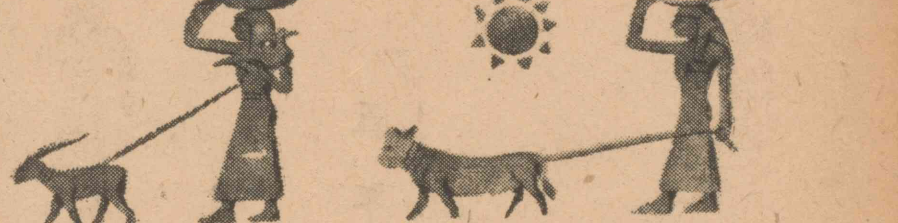
昭和二十五年　月　日文部省検定済小学校国語科用

五年生の国語　下

広島大学図書
0130449748

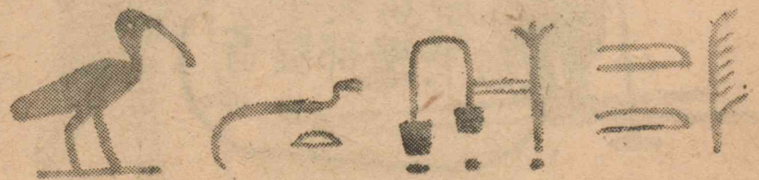
学校図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

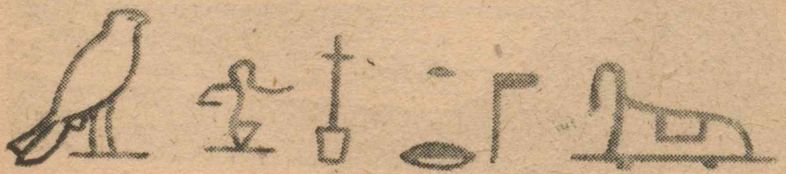


もくろく

一　正月の集まり……四
　雲が切れて……四
　子供新年会……五
　アメリカの年中行事……十二
二　雪が積もる……二十六
　雪のできかた……二十六
　雪が積もる……二十八
　スキー日記……三十一

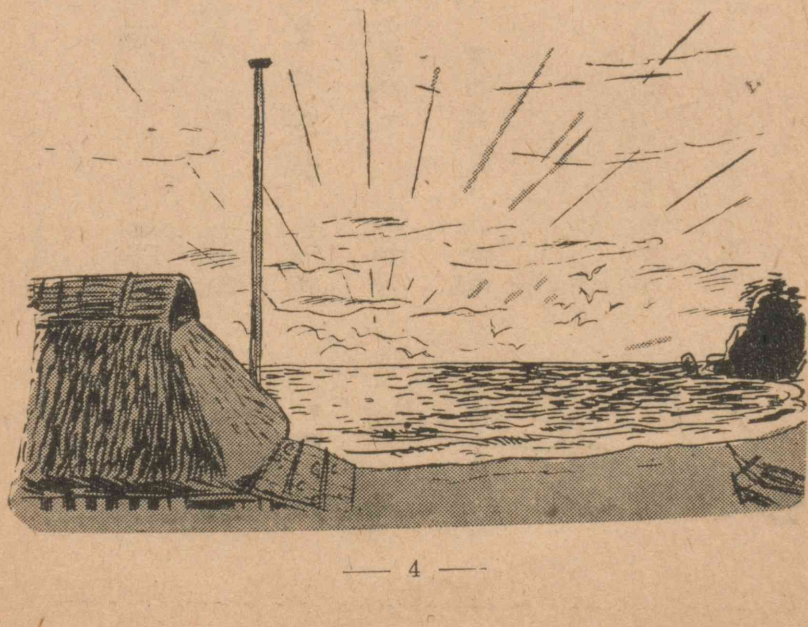


三　子供しばい
　――悪太郎の面――……四十七
四　文明のあけぼの……七十三
　文明はどこに始まったか……七十四
　大むかしの文明　その一……七十八
　大むかしの文明　その二……八十五
　ことばの表……九十九
　漢字の表……百四



一　正月の集まり

雲が切れて
雲が切れて
東の空と海から
新しい年があけてきた
明かるい光に照らされた日本
山も川も家も人も
希望にいきいきとかがやき
力強くこきゅうをはじめた



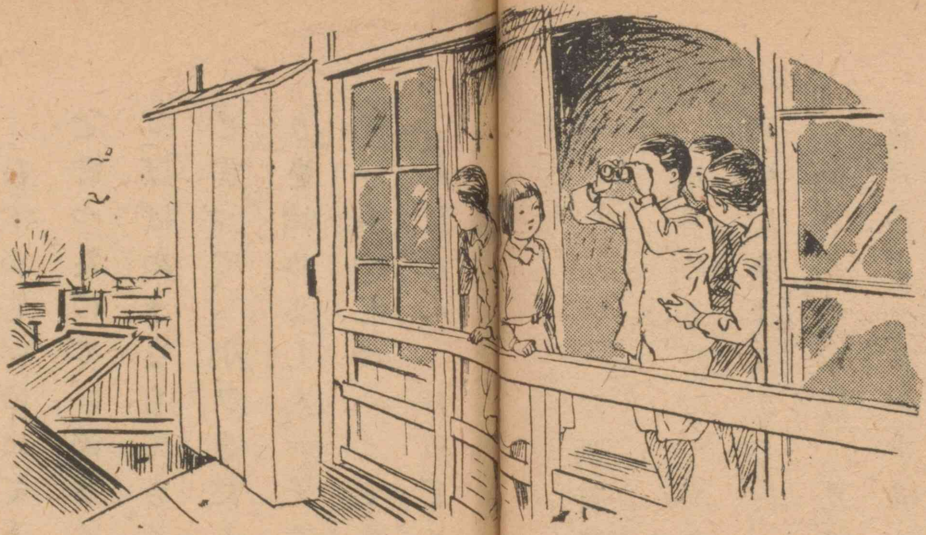
子供新年会

正月の五日に、高木さんと山田君と大川君が、南れい子さんの家に集まりました。

南さんの家は、見はらしのよい高台にあり、ざしきから町の正月のようすが手にとるように見えます。晴れた日には、富士山がよく見えるそうです。南さんのおかあさんが、

「そう眼鏡で見てごらんなさい。町がきれいに見えますよ。」

とおっしゃって、皮のケースにはいった、りっぱなそう眼鏡を持って来てくださいましたので、大川君がいちばん先に借りました。大川君は、目につけたりはなしたり、ねじをまわしたりしてピントを合わせていましたが、



「これはすばらしい。まるで映画を見ているようだ。追いばねをついているぞ。うまいな。ああ、自動車が走って来た。きれいな自動車だなあ。」
と、おもしろそうです。
「おい、大川君。自分ばかり見ていないで、早く貸したまえよ。」
山田君に言われて、大川君は、
「これは悪かったね。」
と、そう眼鏡を山田君にわたしました。
山田君はだまったまま、熱心に方々を見始めました。それから、高木さん、南さん、南さんの妹のよし子さんと、つぎつぎにそう眼鏡をのぞきました。みんながそう眼鏡にむちゅうになっているうちに、ざしきのテーブルには、正月のごちそうがたくさんならべられました。あたたかな午後の日ざしは、ガラス戸を通してざしきの中ほどまでさしこんでおります。
「みなさん、どうぞおあがりください。」
と、南さんのおかあさんがおっしゃったので、そう眼鏡をお返しして、テーブルのまわりにすわりました。おいしそうなごちそうばかりです。
「いただきます。」
みんなにこにこしていただき始めました。いただきながら、きょうは何をして遊ぼうかと相談しました。大川君は、トラン

プがじょうずなので、
「トランプをしよう。」
と言いだしました。高木さんは、よし子さんの方を見て、
「よし子さん、トランプできる。」
とたずねました。よし子さんは、
「むずかしいのはできない。」
と言ったので、南さんは考えていましたが、
「ばばぬきならできるね。」
と言って、小ひきだしからトランプを出して、みんなでばばぬきを始めました。そこへ南さんのおとうさんが、外出から帰っていらっしゃいました。
「みなさん、おめでとう。みんなそろって急に大きくなったようだね。」

とおっしゃって、おすわりになりましたので、みんなは、
「おじさん、おめでとうございます。」
と、あいさつをしました。お茶を持って来られた南さんのおかあさんもなかま入りをなさったので、トランプは急ににぎやかになりました。しばらくすると、げんかんのよびりんが鳴って、どなたかお客様がおみえになったので、また、子供たちだけになりました。
「こんどは福わらいをしましょうか。」
と、南さんが言いました。山田君が、
「福わらいか、にがてだなあ。」
と言いましたが、みんなが、

「おもしろい。さんせい、さんせい」。
と言うので、福わらいをすることになりました。
かんのいい高木さんはじょうずにできましたが、大川君と山田君は、どちらも変な顔をつくってしまいました。
特に山田君は、頭の上に耳をつけたり、あごの下に口をつけたりしたので、みんな大わらいでした。
お客様がお帰りになったので、南さんのおとうさんは、着物に着かえてはいって来られ、
「福わらいをやっているね。じょうずなのはだれ」。

とおっしゃって、なかまにはいられました。
「たいへんなさわぎですね。のどがかわいたでしょう。みかんをおあがりなさい」。
と、南さんのおかあさんが、みかんをたくさん持っていらっしゃったので、みんな福わらいをやめて、みかんをいただきました。みかんを食べ終ってから、山田君が、
「おじさんは長いことアメリカにいらしたそうですが、アメリカの話を聞かせてくださいませんか」。
と、お願いしました。
「それでは、おじさんのへやへいらっしゃい」。
と、おじさんがおっしゃったので、みんなしょさいに集まりました。

アメリカの年中行事

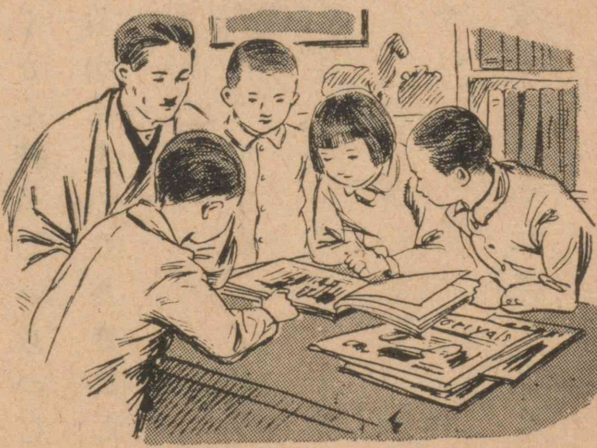
南さんのおとうさんは、外国貿易の仕事をして、長いこと、アメリカにいられた方です。

へやの中には、本がたくさんあり、アメリカの絵や写真がかざられています。英字新聞やアメリカの美しいざっしが、つくえの上に置いてあります。

「このアルバムを見ると、アメリカのことがよくわかりますよ。」

と、おじさんは、大きなアルバムを見せてくださいました。

みんなはアルバムを囲んですわりました。



「アメリカの話といっても、何の話をしましょうかね。おじさんがアメリカにいたのは十年ほど前ですから、今は少し変わっているかもしれません。そうそう、アメリカの年中行事の話をしましょう。」

アメリカには祝祭日はあまりありません。そのかわり、春夏秋冬にわたって、たくさんのおもしろい行事があり、子供たちはみんな首を長くして待っています。

まずお正月です。ふるい年がくれて新しい希望の年があけると、教会のかねがいっせいに鳴りだします。町の人たちは、

自動車をぶうぶう鳴らしたり、バケツやなべをたたいたりします。そうして、どこのおうちでも、「新年おめでとう」と言ってお祝いをします。元日はお休みです。前のばんおそくまで起きていますから、元日はみんなゆっくり休みます。町は静かで、人も車も通りません。べつに、お正月のかざりといったものもありませんし、御年始に行く人もありません。アメリカのお正月は、日本に比べるとまことに静かなものです。

二月二十二日はワシントンのたんじょう日です。この日は、学校も役所も銀行も会社も、みんな仕事を休みます。建国の父ワシントンについて、大統領がラジオでお話をします。

みなさんは、ワシントンが小さい時、おとうさんのたいせつにしていたさくらの木を、まさかりで切ってしまい、それを正直に言った話を知っているでしょう。それで、この日には、おかあさんが特別にこしらえてくださるケーキに、白いおさとうをかけた上、まっかなさくらんぼうをのせます。ナプキンは、まさかりとさくらの木のもようのついているのを使います。

このおかしをいただきながら、アメリカの少年少女たちは、自分たちの祖先が三百年の間苦心して建設したこの民主主義の国アメリカを、本当に愛し、もっと良い国にするために力をつくすことをちかいます。

ポトマック川の岸のやなぎが青ばみ、池のまわりにある日本ざくらのつぼみがふくらんでくると、楽しいイースターです。

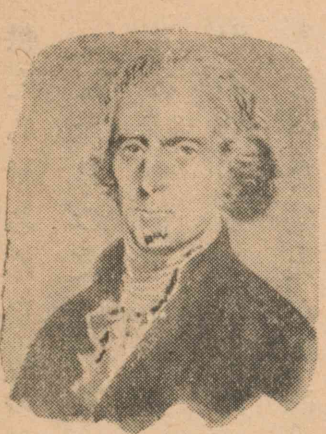
子供たちにとって何よりの楽しみは、美しい色のついたたまごをもらえることです。イースターのあくる日には、ホワイト・ハウスという大統領の住んでいるおうちの庭が、市民のために公開されます。しばふがあり、山があり、ふん水があり、花だんがある、その広いお庭へ、子供を連れた人はだれでも自由にはいることができます。子供のない人は、よその子供を借りて、たまごのはいったかごをさげて行きます。

ぶたいができていて、軍楽隊がにぎやかに「春の曲」をかなでています。子供たちは、赤だの黄色だのにそまった美しいたまごをころがして遊びます。大統領と大統領夫人がえん側からおりて来ますと、子供たちはみんな走って行って、あいさつします。大統領はにこにこしながら、みんなの頭をなでてくれま

す。子供たちは、大統領からおいしいレモンのパンチなどをごちそうになって帰ります。

アメリカには、おぼんの祭りはありませんが、五月三十日に、招魂祭というのがあって、なくなった方々、特に戦争で国のために命をささげた人々をしのび、お墓まいりをして感謝をいたします。

七月四日はアメリカが独立したおめでたい独立記念日です。



ラジオは「独立宣言書」を放送し、みんなの記おくを新たにします。ワシントンのお墓、ジェファソンの記念のとうは、朝からおまいりする人がたえません。午後は陸海軍と陸戦隊の行列があって、子

供たちはみんな道の両側にならんで見物します。

記念日の夜は、アメリカのいたる所で、何百という花火をうちあげます。日がくれて、記念とうがやみの中にぽっと白くうかんでくると、ぽんぽんと花火のあがる音が町の中にひびいて、きれいな花火が空高くあがるのです。しかし、みんなが待っているのはしかけ花火です。これは、ホワイト・ハウスの後にある広い公園であげるのですが、花火があがると、まず、せの高いワシントン大統領のすがたがあらわれます。みんなはく手してむかえます。つぎは自由のかねです。このかねは、今はわれていますが、これを見て、アメリカの人々は、自由のために戦ってきた祖先をしのびます。そのつぎには、今から百年ほど前に、東部から西部に移住して行った人たちのほろ馬車が出ます。

荷物をたくさん積んで、牛や犬をつれて長い旅を続け、新しい自由の村や町をつくった人たちのすがたです。やがて、見あげるほどせの高いリンカーン大統領があらわれます。リンカーンはアメリカを愛し、アメリカを民主主義の国とすることに力をつくした人です。花火を見ながら人々はこの偉大な恩人に感謝し、心から頭を下げるのです。最後に、大きなアメリカの国旗があらわれます。しばふにすわっていた人たちがいっせいに立ちあがると、楽隊は国歌をかなで、続いて、「神よ、アメリカを祝福したまえ」という歌をかなでます。みんな声をはりあげて、いっしょに歌います。

これが半年の間のおもな行事ですが、まだこのほかに、五月には「母の日」と「父の日」があります。

九月にはいりますと、第一月曜日が「労働祭」です。人々はこの一日仕事を休んで、労働の尊いことを考え、労働者のほねおりに感謝します。

十月の最後の木曜日はハロウィン祭です。これは何と説明してよいかわかりませんが、日本にはないお祭りです。じごくに住んでいるたくさんのま女がほうきに乗って、この日の夜、出て来るというのです。ですから、この日は全く子供の日といってもよく、子供たちは畑に行って、とうもろこしのかわいた葉やくきを集めて来て、へやをかざります。それから、大きなかぼちゃの中をくりぬいて目や鼻や口をつけ、ろうそくを中に立てて、ちょうちんをこしらえます。そして、電

燈をつけず、暗いすみにかぼちゃのあかりだけを置きます。

やがて、遠くの山に赤い火がちょろちょろと燃えだします。どこからか、うなるような声が聞こえてきます。本当に気味の悪いことです。「きゃっ」と言ってにげだす女の子もあります。みんな雨戸をしめて、じっと息をころしています。ま女（じつはいたずらな子供がやるのです）が、せっけんでまどガラスへ何かいたずら書きをして行きます。ごみばこをよそに運んだり、門の戸をはずしたりします。この夜に限って、たいがいのいたずらはしかられませんが、しかし、あまり度の過ぎたいたずらはとめられています。

学校では、この夜ダンスがあって、みんなお面をかぶったり、海ぞくのなりをしたり、ま女のまねをしたりしてやって来ます。

だれがだれだかわかりません。かぼちゃのパイとりんごのサイダーは、ハロウィン祭につきものです。

秋もだんだん深くなって、北の方ではそろそろ雪がふり始めるころになると、感謝祭の日が待たれます。秋のとり入れもほとんど終って、これから冬のしたくにいそがしくなります。アメリカの家にはあなぐらがあって、ここに冬中の野菜やくだものをしまっておくのです。そのしたくもできた十一月の最後の木曜日が感謝祭です。サンクスギビングの日といって、ニューイングランドに上陸した清教徒たちが、二年目の秋の収かくを神にささげて感謝した日です。それからずっとこの日をまもってお祝いするのです。この日には、遠くの学校にはいっているにいさんも、およめにいっているねえさんも、みんな両親のも

とに帰り、一家そろってごちそうを食べたりお話したりします。また、この日には、貧しい人をわすれず、大きなかごに野菜やにわとりやパイやおかしなどを入れてとどけてあげます。サンクスギビングがすむと、アメリカの子供たちは、「もういくつねるとクリスマス」と指おり数えて待ちこがれます。それほどこの日は楽しみなのです。

クリスマスは、みんなも知っているように十二月二十五日で、これはイエス・キリストがベツレヘムの馬小屋で生まれた日です。町の店には、クリスマスツリーといって、山からきって来た大きな木が立てられ、そのえだというえだには、星だの銀のく

さりだのが、美しくかざられます。デパートのまどには、サンタクロースのおじいさんが赤いコートを着て、となかいの引くそりに、たくさんのおみやげを積んで乗っているすがたが見られます。

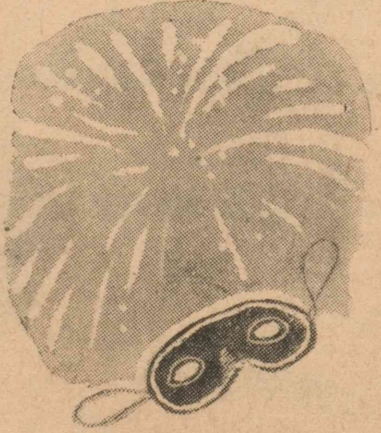
「だいぶ長くなりましたね。このへんでおしまいにしましょう。このつぎには、学校の話をしてあげましょうか。」

――みんなは、ごちそうになったり、お話をしていただいたお礼を言って帰りました。

○日本の年中行事、住んでいる土地の変わった行事について調べてみましょう。

○おじいさん、おばあさんからむかし話を聞いてみましょう。

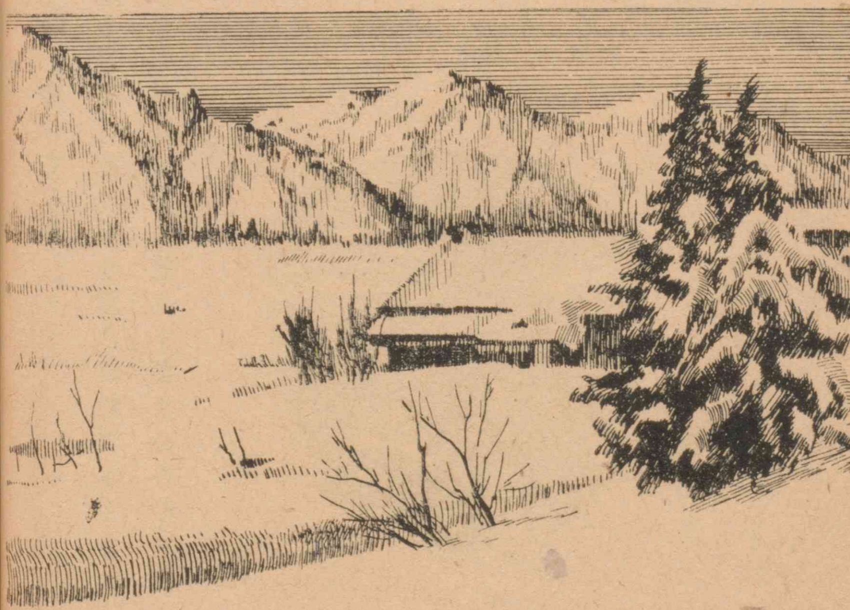
○お話を聞く時には、お話する人の方を見て、しっかり聞きましょう。なお、話を聞いておくだけでなく、わすれないうちにその要点を書きとめておきましょう。



二　雪が積もる

雪のできかた

　空気中にふくまれている水分が氷点（〇度）の温度にあうとつゆの代わりにしもをむすぶことは知っているでしょう。高い空気中でも非常に寒い時には、これと同じことが行われます。温度が氷点以下に下がると、空気中の水じょう気は小さい水玉の雲を作らずに、すぐに氷の結

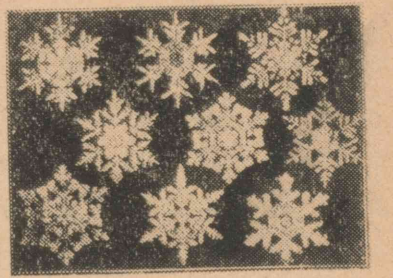


晶の雲（雪雲）を作ります。そして、さきにできた氷の結晶のまわりに、あとからできる氷の結晶が結びついて、だんだん大きな氷の結晶となります。こうしてできた氷の結晶が空からふって来るのを、私たちは雪といっているのです。

　雪の結晶は、雨つぶがこおったものでもなければ、雲の水玉がこおったものでもありません。水じょう気からすぐに氷の結晶となったものです。氷点下二〇度くらいのところでは、水じょう気はすべて氷の結晶になりますが、氷点下一〇度とか五度くらいの寒さでは、かならずしも水じょう気は雪になりません。

　ちらちらとふって来る雪、その雪の一つをとって、けんび鏡でよく見ると、いろいろな形をしたものがあります。

　アメリカのベントレーという人は、一九三一年に、雪の結晶



の写真を三千まい集めて、これを本にして出版し、世界に有名になりました。日本では江戸時代の終りに、土井利位という人が、たくさんの雪の結晶を観察して、「雪花ずふ」というりっぱな本を作りました。最近では、雪の結晶について深い研究をした中谷宇吉郎博士が、人工的に雪の結晶を作ることに成功し、雪の結晶のいろいろな形は、どんな気象状態の時にできるかをあきらかにしました。

雪が積もる

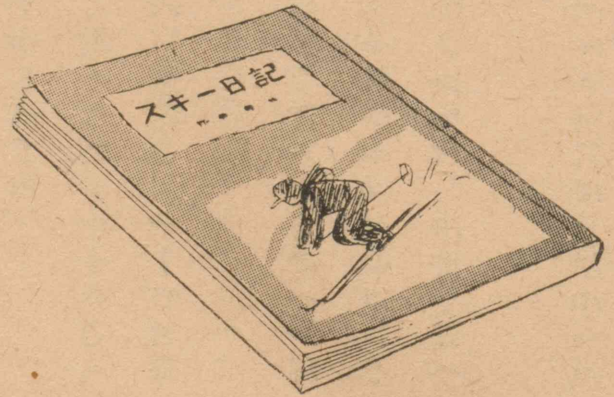
雪が積もる
山の上の小さな学校で
けさも始業のかねが鳴る
オルガンがひびき
子供たちの
本を読む声や
手をあげる声が
かん高く聞こえる
そして　しばらく
しんとする
ああ　ああ　静かだ

まったく　静かだ
木々がだまって
それを聞いている
どこか遠い谷ぞいの
雪にうもれた根かぶや葉のかげで
山々のりすやうさぎたちが
耳をたてて　じっと
それを聞いている

スキー日記

東北の秋のようすを細かに知らせてくれた田村君から、こんどは、雪景色を写生した絵が五まいと、スキー日記が送られてきました。昼休みの時間に、美しくえがかれたその絵を教室にかざり、みんながうばいあうようにして、スキー日記を読みました。

田村君は、こちらにいたころから運動がすきだったので、たちまちスキーがじょうずになったようです。



1月20日　晴

きょうもよい天気で、雪の山がきらきらと美しくかがやいている。

放課後、中山先生が学校の近くのスキー場へすべりに行くとおっしゃるので、ぼくたちなかよしの5,6人のものが、先生にお願いして、学校のスキーをお借りして、いっしょに連れていっていただいた。

スキー場に行ってみると、わりあいに人が少なく、よく雪がかためられているのですべりよさそうだった。いつも来てすべるスロープのところへ来ると、先生がぼくのかたをたたいて、

〝田村君は、たちまちスキーがじょうずになったそうですね。ひとつすべって見せてくれないか。〟

とおっしゃった。

〝ぼくはまだへたですよ。やっと直滑降ができるようになっただけですよ。〟

と言って、しりごみしていると、お友だちがさかんに、

〝田村君、やれよ、やれよ。〟

と勧めるので、

〝よし、やってみよう。〟

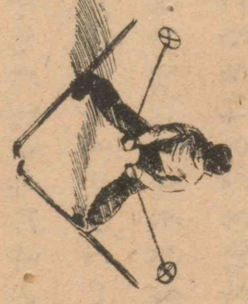
と、したくを整えて、小高いところに登って行き、ゆるやかなスロープをえらんで、つえに軽く力を入れ、すうっとすべりだした。だれかがじょうずにすべったコースにのったので、とてもすべりよい。すうすうと気持よくすべっていく。先生やお友だちの前は姿勢がくずれないですべっていけたが、もうそろそろ止まろうかと思ったところに大きな雪のあながあり、そこをさけることができないでしりもちをついてしまった。立ちあがってみんなの方を見ると、

〝田村君、うまい、うまい。〟

と言って手をうっていた。ぼくはしりもちをついてしまったので、はずかしかったが、そうとう長くすべることができたのでうれしかった。みんなの所まで登って来た時には、からだがぽっぽっと熱かった。先生はにこにこわらいながら、

"田村君は上達が早いなあ。"

とほめてくださった。それからみんな自由にすべりだした。お友だちはみなじょうずで、ほとんどころばない。楽しそうにすうすうとすべって行く。ぼくも早くお友だちのように思うようにすべりたいと思っていっしょうけんめい練習した。先生がぼくのそばへすべっていらっしゃって、半制動回転、全制動回転を、ゆっくりこまかに、何回も何回もやってみせてくださった。ぼくはそれをまねしてすべってみる



のだが、なかなか思うようにいかない。

先生は雪の上につえで図を書いて説明してくださった。ぼくは何回ころんだかわからないが、回転をくりかえしくりかえし練習した。ひたいからはあせのたまがぽたぽたと落ちてきた。

"あんまりやりすぎると、つかれるぞ。もうすこしゆっくりやれよ。"

と先生はやさしく注意してくださった。

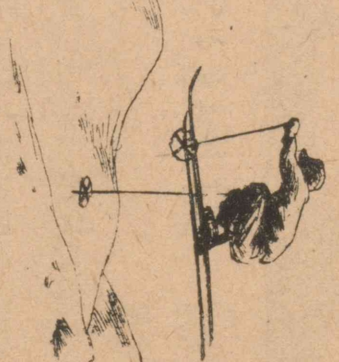
"おそくならないうちに帰ろうか。"

と、先生がみんなにおっしゃったので、夕ばえの美しい雪の山をながめながら、スキー場を下った。

1月23日　くもり

くもっていてはっきりしない天気だが、日曜日なので、午後、父とスキー場

にでかけた。日曜日のせいか、見なれない人々の顔もそうとう多く、いつになくスキー場はにぎやかだった。
直滑降、制動回転が、どうやらできるようになったので、きょうは、いつもすべるところよりはずっと上の方へ行った。そこはすべるところも長く、雪もよごれていない。父は生まれが雪国で、子供のころからスキーをやっているので、スキーはとてもじょうずである。ジャンプをやったり、かた足のスキーですべったりして見せてくださった。
ここはスロープが急なので、一気にすべりおりる気持は何ともいえない。しかし、ともすると、ぐんぐん加わってくるスピードを乗りこなせなくなり、うまくすべっていても、ついこわくなって、ふらふらとこしをおろした



り、横にころげたりする。思いきりが足りない、どきょうが足りないのだと思った。
父はぼくのスキーを見ていて、
"一郎、おまえはまだこわがっているよ。だからかたに力がはいりすぎている。もっとかたの力をぬきなさい。"
と、おっしゃったので、ぼくはかたに力を入れないようにしてすべってみた。
"だいぶ、よくなったぞ。"
と、父にほめられたので、ぼくはうれしくて何回も何回も急なスロープをだいたんにすべった。
スキー場のほとんどちょう上に近いところまで登られた父が、つえでぼくに合図されて、急なスロープを一気にすべってこられた。
"ものすごい速いスピードだ。美しい曲線をえがいて、自由自在にすべる。ぼ

くも早く父のようにすべりたいなあと思った．下の方まですべっていかれた父は，たちまち登ってこられ，

“山小屋へ行ってひと休みしよう.”

とおっしゃったので，ぼくは父のあとについて山小屋へ行った．山小屋の中には大きないろりがあって，そのまわりにスキーに来た人が，4，5人何かおもしろそうにお話をしながらあたっていた．ぼくたちが行くと，席をあけてくださったので，なかまいりをしてあたった．山小屋のおばさんが，すぐにお茶を持って来てくださった．

“みかんをください.”

と，父がおばさんに言うと，

“きょうはみかんはありません．りんごではいかがですか.”

と言われた．

“りんごでもいいです．5つ6つむいてきてください.”

とたのまれた．しばらくすると，おばさんはおぼんにりんごをむいて持って来てくださった．

“みなさん，ひとついかがですか.”

と，父はまわりの人にりんごをすすめた．

“ごちそうになります.”

とみんなでいただいた．りんごは冷たくて歯にしみとおる．それがまたとてもおいしい．山小屋を出た時は，もう夕方になってしまったので，急いで家に帰った．

夜，父から，スキーの本を見せてもらい，写真や図解によって説明していただいた．母もそばでいっしょに説明をきいておられた．

"このつぎの日曜にはおかあさんもいっしょにすべりに行きましょう．"

とおっしゃったので，

"おかあさん，スキーできるの．"

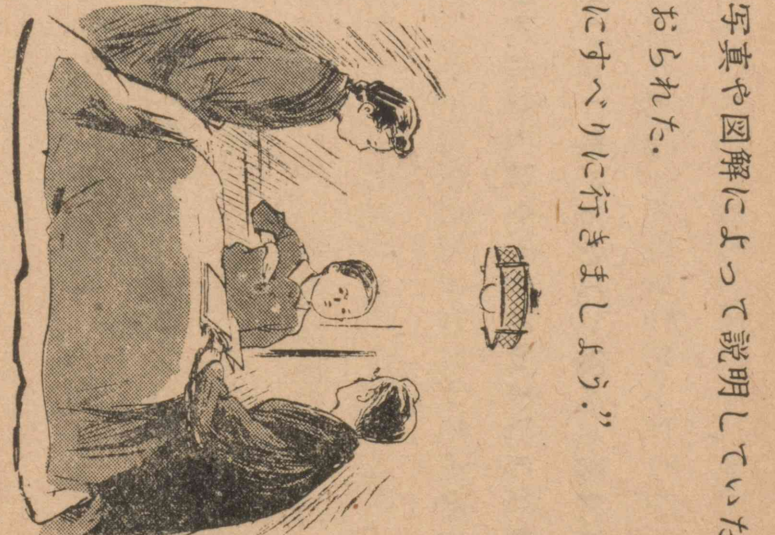
とぼくがたずねたら，

"おかあさんはスキーがじょうずなんだよ．"

と，父は母の方を見ながらおっしゃった．

"さあ，10年もスキーをしないから，へたになってしまったでしょうね．"

と，母はわらいながらおっしゃった．



1月25日　晴

学校の昼休みの時間に，屋内体育室でスキークラブの相談会を開いた．スキークラブは4年以上の男女で35名おり，全員が集まった．部長は6年生の高木さんで，きょうはスキー大会を開こうということについての相談が行われ，指導してくださる中山先生も賛成なさったので，30日（土）の午後スキー場で開くことに決まった．それから赤組と白組との組わけが行われた．ぼくは白組になった．会場を作ることや，プログラムを作ることは6年生がやることに決まった．

中山先生からは，

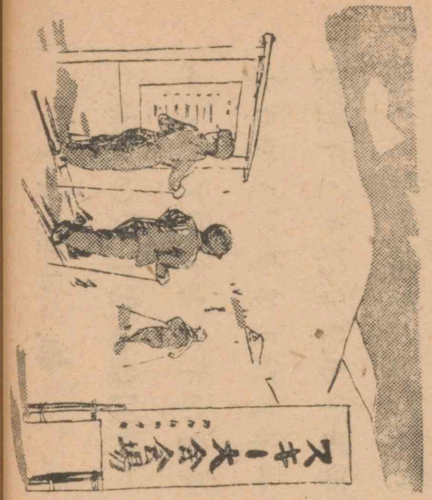
"この機会にみなさんによく聞いてもらいたいことがある．"

と言われて，学校のスキーについての手入れ法やせいとんについての細かな注意があった．

放課後，白組はスキー場へ練習に行き，夕方まで練習した．

1月30日　晴後くもり

待ちに待ったスキー大会の日がきた．朝からよい天気である．6年生のスキークラブ員は先生といっしょに早く学校を出発した．ぼくたちは30分ほどおくれてスキー場へ行った．入口にはスキー大会の大きなたてふだが立っており，



そのそばにプログラムも出ていた．出発線と決勝線には目印の赤旗がひらひらしている．200メートルの出発線が高いところなのにはびっくりした．6年生と先生方はあちらへいったり，こちらへいったりいそがしそうにしたくをしている．

しばらくすると，集合のふえがなったので，山

小屋の前に集まった．

部長の高木さんが，大きな元気のいい声で，

"きょうはよい天気で，それに風もない，スキーにはもってこいの日です．日ごろきたえたうでまえをじゅうぶんにあらわして，元気よくやってください．"

と開会のあいさつをした．中山先生からは，スキーの競争についての細かい注意があり，スキー体そうにうつった．

ぼくは100メートルスキーに出た．出発線に立った時は，ばかにコースが長いように見え，足がぶるぶるふるえた．

"ピリピリピリ"

ふえの合図で，いっせいにすべりだした．

スキー大会プログラム

1. 開会のあいさつ
2. スキー体そう
3. 100メートル
4. 200メートル
5. ジャンプ
6. 先生のもはんスキー
7. へい会のあいさつ

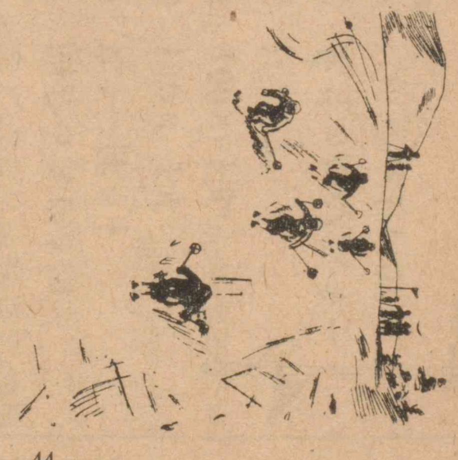
"さきの方ばかり見ていないで足もとに気をつけなさい。"

という、先生の注意を思い出し、こしをすえて足もとに気をつけてすべった。だれかが前の方をすべっている。どうにかしておいつこうとするがどうしてもおいつけない。

"がんばれ、がんばれ。"

というおうえんの声が耳に聞こえてくる。むちゅうで決勝線にすべりこんだ。2等の旗がぼくの手にわたされた。ぼくはうれしくてたまらなかった。1等は小林さんだった。

部長の高木さんはものすごくがんばり、200メートルスキーには、2等を5メートルぐらいはなして1等になり、ひき続いて行われたジャンプにはすばら



しく飛んで、みんなをおどろかせた。

先生方のもはんスキーはみごとで、まるで映画でも見ているようだった。なかでもおもしろかったのは、余興に行われたりんご拾いだった。りんご拾いというのは、雪の上にりんごが置いてあり、それをものすごいスピードですべって来て拾うことである。中山先生が、りんごを拾ってから、ぽんと上にあげて受け取ってすべった時は、みんなはく手かっさいをした。

白組25点、赤組23点で、白組が勝った。ぼくは2等で2点を入れたので、得意だった。へい会のあいさつは、4年の女生徒で、100メートルスキーに1等をとった平田さんだった。赤いセーターを着たかわいい子で、4年生とは思えないしっかりしたあいさつをしたので、みんな感心した。最後に校歌を元気よく歌って解散した。いつの間にか雲が出てきて、雪の来そうな空もようになってきたので、急いで家に帰った。

○雪のできかたはわかりましたか。なお、気象に関する書物を読んだり、お話を聞いたりして、いっそうくわしく調べてみましょう。

○ひらひらと降ってくる雪の一ひらをうけとって、虫めがねやけんび鏡で、その結晶を調べてみましょう。

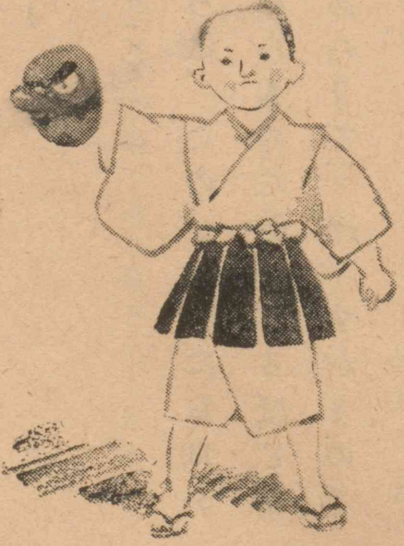
○ことしになって日記を書いている人が多いと思いますが、根気よく書き続けましょう。なお、スキー日記のように、何か一つの運動や作業やできごとなどを、こまかに書く日記、たとえば、も型作りの日記、し育日記、さいばい日記、子供会日記、反省日記などの日記も書いてみましょう。日記を書くことは、文字や文章がじょうずになるばかりでなく、自分の歴史を記録するたいせつな勉強です。

三　子供しばい

——悪太郎の面——

人——
悪太郎
村の男——源五郎
旅のおもちゃ屋
村のわか者1・2
村の子（姉と弟）

所——
村はずれのとうげ



まくあく。

ぶ台中央に大きな木がしげっている。その左右は草むら。

悪太郎とよばれている寺の小ぞうが出て来る。

悪太郎　(たちどまってあたりを見ながら、ひとりごと……)

「うん、ここがいい。小さいころは、このとうげにおおかみや追いはぎが出ると聞かされたものだが、なるほどぶっそうな場所だ。わしもこのあたりで、通りすがりの者をおどかしてやるとしよう。

(木を見上げて)さいわい立ち木もあるし、このかげからとび出したら、たいていのやつは、きもをつぶすにちがいない。――」(と、木のまわりをひとめぐりする。そして、ふところからてんぐの面をとり出す。それをながめて……)じつに良くできた。

ひとばんねずに作っただけある。さあて、これをこうかぶって――と……(面を顔に当てる)

やい、てんぐ様だぞ――と、どなったら、は、は、は、……おもしろいぞ、おもしろいぞ、は、は、は、……

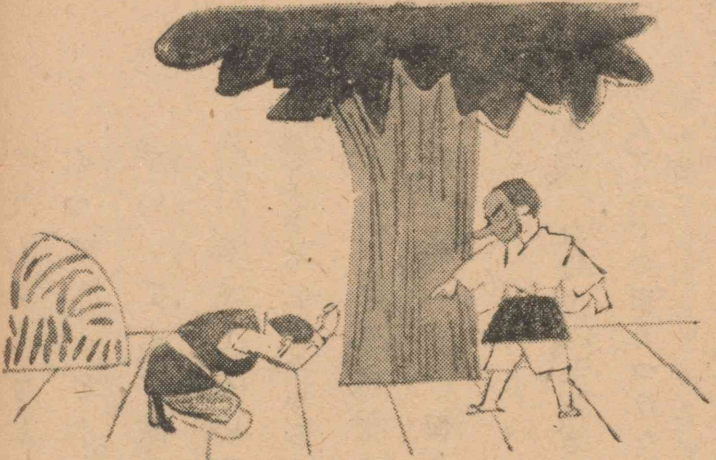
(面をとる。下手から上手をのびあがって見て……)や、来た、来た――あれは村の者だな。よし、さっそく始めるとしよう。――」(と、面をかぶりながら木のかげにかくれる)

村の男、上手からたきぎをせおって出て来る。木の前を通り過ぎたころ、後からてんぐの面をつけた悪太郎とび出る。

悪太郎　(大声に……)「やい、やい、やい……」。

村の男、ふりかえっててんぐを見ると、「助けてくれ――」と、たきぎをほう

り出してその場にすわり、頭の上で手を合わせる。



悪太郎（おどかすように、ゆっくりと）「おれは羽黒山のてんぐじゃ……」。

村の男「へっ――」。（と小さくなる）

悪太郎「その方の名まえを言え」。

村の男「へっ。源、源五郎と申します。どうぞお助けを……」。

悪太郎「源五郎虫か、虫なら助けてやろう。さあ、行け」。

村の男「へい、へい……」。

村の男、そろそろはいながら悪太郎からはなれる。悪太郎、大きなくさめをする。男「へっ」と、そのまま小さくなる。

悪太郎「――なあんだ、まだぐずぐずしてるのか。（急に大声で）そんなにわしのそばがよければ、とって食うぞ！」

村の男「助けて――」。（と悲鳴をあげて、ころげるように下手にかけさる）

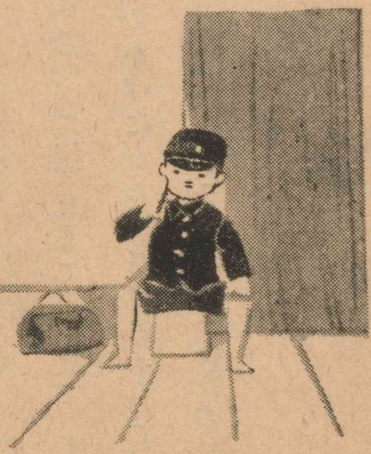
悪太郎「は、は、は……（と、のびあがって見送りながら）にげる。にげる。よっぽどこわかったとみえる。（上手を見て）や、また、あら手が来たぞ。――（と、木のかげにからだだけかくして、その方を見る）ふふん、旅の男だな。よし、こんどはやりかたを変えてみることにしよう。――」（と、かくれる）

――しばらくして、旅の男、ふりわけの荷物をかたにして通りかかる。

旅の男　（たちどまって）「ああ、くたびれた。山道はさすがにからだにこたえる、ここらでひと休みするとしようか。――」（と、木の根かたにこしをおろして、あせをふく）

――悪太郎、そっと首を出してそのようすを見ているが、やがて、両ひじをはって身がまえ、「ウォー」と、けもののような声を出して、すがたを見せる。

――男、びっくりして、木の根かたをとびのき、てんぐの面を見るなり、「ヒ



エッ」と悲鳴をあげ、頭をかかえてすわりこむ。

悪太郎　「ウォー……ウォー……」。

旅の男　「おた……おた……おたすけ。――」（と、ふるえあがる）

悪太郎　「は、は、……弱虫め、こうしてくれる。――」（と、男のせに馬のりになる）

旅の男　「どうぞ命ばかりは……」。

悪太郎　「おまえは旅の者だな」。

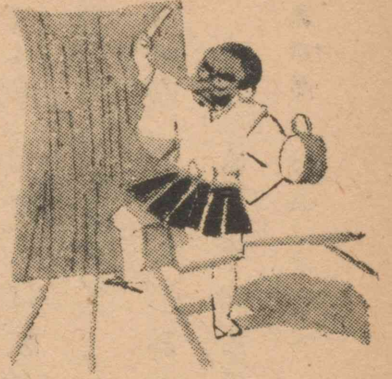
旅の男　（頭もあげず）「へい、旅の、旅のおもちゃ屋です」。

悪太郎　「なんだ、おもちゃ屋？　それはおもしろい。持っているものを出してみろ」。

旅の男　「へい……へい。――」（と、そのままのかっこうで、落ちているふ

りわけ荷物をひきよせ、その一つを開く）

悪太郎（男のかたごしに、その包みの中を見て……）「うん、いろいろあるな。——（と、一つ一つをとりあげておもしろそうに見る。そのうちにたいこをとり出してたたいてみる）



これはいい音がする。このほかに鳴り物はないか？」

旅の男（そっと頭をもたげて）「へい、ふえがあります」。

悪太郎「ふえ？　うん、これか、——（と、さしだされたふえをとりあげ、男のせからおりる。ふいてみるが鳴らないので……）おまえ、ふいてみろ。——」（と、投げてやる）

——男、ふえをとりにいくようなふりをして、悪太郎から二三歩はなれる。

そして、こわごわふえをふく。

——それを聞きながら、悪太郎は手にしたおもちゃのたいこをたたく。

悪太郎「やあ、これはおもしろい、もっとふけ……もっとふけ…………」。

——悪太郎、調子よくたいこをたたく。しまいにはこしをうかせ、いい気持になってたたき続ける。

——男、ふえをふきながら、悪太郎のようすを見て、すこしずつはなれる。そのうちに急にたちあがって下手に向かって走りさる。

悪太郎（にげるのに気がついて）「こりゃ待て……は、は、は、……う

まくにげたな。それにしてもいいものが手にはいったぞ
……」。

——悪太郎、てんぐの面を顔の上にずりあげ、ふえをいじったりたいこをたたいたりする。

——そのうちに大きなあくびをして、たいこを持ったままいねむりしてしまう。

——しばらくして、下手からぼうきれを持った村のわか者1・2、それに最初の村の男、旅のおもちゃ屋など出てくる。

村の男　(ぶたいのはしから、おそるおそる木の方をさして)「あの木だ……あの

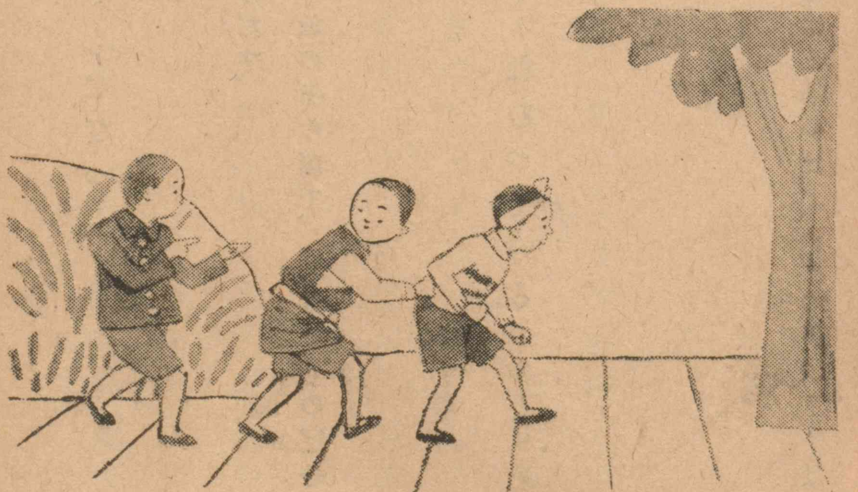
木の後だ。思い出しても身ぶるいする……」。

旅の男　(村のわか者に)「わしの時もそうでした。いやもうおそろしい顔をしたてんぐで、ひと目見るなり、きもをつぶしました。

「——」(と、こわがる)

わか者1　「なあに、もうだいじょうぶ——わしら四人なら、てんぐだろうが、おにだろうが、こわがることはない。」

わか者2　(1のそでをひっぱって、木の根かた



をさし）「おい、あれはなんだ？」
村の男（悪太郎を見て、おどろいて）「あっ、てんぐだっ……」。
――その声に一同おどろいて、「ワッ」とにげだす。
――しばらくして、わか者1、2、村の男、旅の男の順で、足音をしのばせてもどって来る。
わか者1（声をひそませて）「ねむっている……ねむっている……さあ、今のうちだ……」。
わか者2「おちついて……おちついて……」。
――わか者1、2、は木の後左右に、村の男は上手のはし、旅の男は下手はしに、それぞれぬき足で位置を決め、はちまきしたり、うでまくりをしたりして用意をする。

わか者1（木の左かげから首だけ出して悪太郎を見る）「や、こりゃお面じゃないか……」。
わか者2（木の右かげから）「うん、こりゃにせのてんぐだ」。
旅の男（かけよって）「お面？　や、こりゃどうじゃ、お面だ、お面だ」。
村の男（かけよって）「なんだと、……うん、これにおどかされたのか……」。
わか者1（面の下に、ねむりこけている顔を見て）「おい、これは寺の悪太郎だぞ」。

わか者2「なるほどそうか――悪太郎のしそうなことだ。寺のこぞうでありながら、することなすこといたずらばかりだ。うんとこらしてやれ」。

村の男「それがいい、それがいい。――」（とたきぎをとってふりあげる……）

旅の男「いやいや、ちょっとお待ちなさい。こらすのはあとでもいい、わしにいいちえがある。じつは。――（と、みなをそばによせ、小声で何かささやく）どうです？」

わか者1「それはおもしろい」。

わか者2「さっそくやってもらいましょう」。

村の男「わらいものになるところを見てやりますかな……」。

――三人がなお話している間に、旅の男は、さっき投げすてて行ったふりわけ荷物の一つをとり、それを解く。そうして、今はすっかりからだをたおしてねこんでいる悪太郎に、おたふくの面をつける。

――一同それを見てふきだしそうになるが、とたんに悪太郎があくびするので、こそこそと左右の草むらにかくれる。

――入れちがいに村の子供――姉と弟が草かごをせに上手から出てくる。

――せのびしていた悪太郎、ふたりに気づいて急に立ちあがり、両手をひろげてたちふさがる。

――姉と弟、あっけにとられているが、おたふくの面を見てわらいだす。

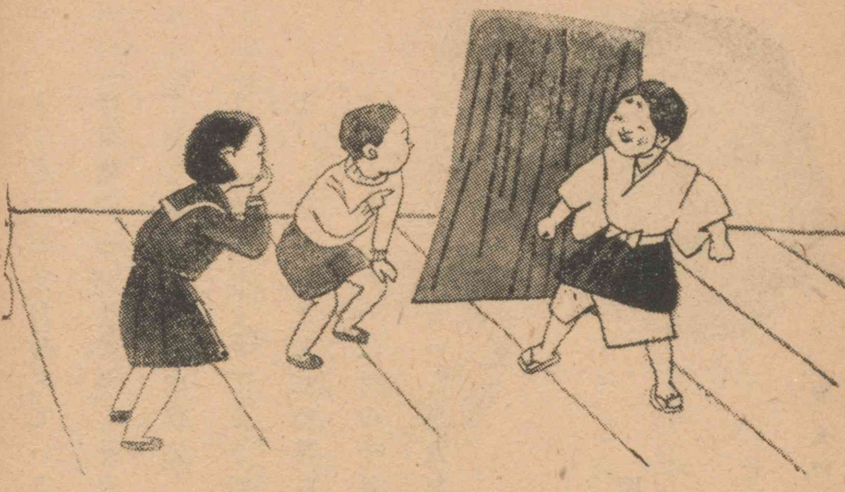
悪太郎「ウォ……ウォ……」（ふたりがわらい続ける

のでとびあがって）なにがおかしい、羽黒山のてんぐ様だぞ」。（と、おどかす身ぶりをする）

弟　「ねえちゃん――なんだろう、あれ？」

姉　「さあ、なにかしら――いたずらをしてわらわせているんでしょう……」。

悪太郎「おや、子供のくせに、ちっともこわがらないな……やい、やい、やい。――」（といよいよ大げさな身ぶりをする）



――ふたり、ますますわらう。

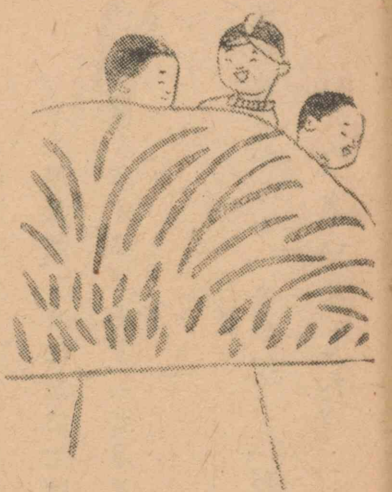
――左右の草むらにかくれていた四人も、こらえきれず立ちあがってわらう。

悪太郎（それに気がつかず）「どうも変だな。やい、子供たち、――このてんぐ様の鼻が見えないか。――（と、鼻をにぎろうとすると、すっぽり手がはずれる）や、こりや変だぞ。――」（と、右手、左手で鼻をにぎろうとくりかえすがつかまらない）

――一同、声をあげてわらう。

――悪太郎、あわてて面をとり、おたふくの面に変わっているのでおどろく。

――その時、左右の草むらから四人がとび出して悪太郎をとり囲む。



人々「さあ、てんぐをつかまえろ」。
人々「おたふくをつかまえろ」。
悪太郎「ごめんなさい、ごめんなさい……」。
人々「さあ、つかまえろ」。
人々「もう、にがさんぞ」。
悪太郎「ごめんなさい、ごめんなさい……」。

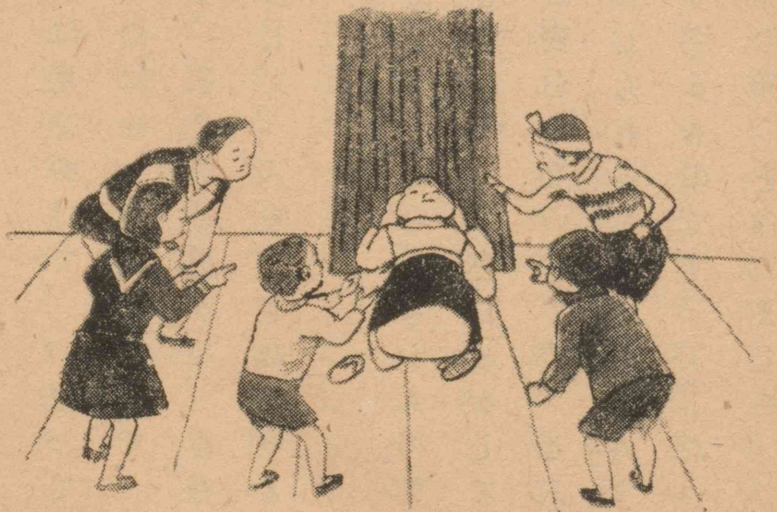
――悪太郎、右に左ににげようとするが、人々がつめよるので、木のまわりをぐるぐるまわり、とうとう木の根かたに後向きになってすわりこむ……。

旅の男（からかい半分に）「おや、羽黒山のてんぐ様、いったいどうなさいました。――」（と、悪太郎の顔をのぞきこむ……）

――悪太郎、いよいよ小さくなって、手にしたおたふくの面で頭をかかえこむ。

――おたふくの面が、ふるえる悪太郎の頭の後で、にこにこわらっている。それを見て一同、手をうってはやしたてる。

――そのわらいのうちにまくになる。



○げきのつかみどころ

世の中には、力がないのにあるように見せかけて、いばってばかりいるものがあります。知らないのに知ったふりをして、じまんばかりしているものもおります。そうかと思うと、自分が受け持たされている役目を悪く利用して、人をいじめている、ひどいものもいます。

こんな人たちは、みんな本当の自分を知らないおろかものです。たとえば、おにやてんぐのお面をつけて、人をおどかしてはいい気持になっているのと、少しも変わらないのです。こんなおろかな人に限って、お面をひきむしられると、あわてたり、なきべそをかいたり、うろうろしたりするものです。――だいたいこんなことを考えながら、「悪太郎の面」を作りました。

つくりものの面で人をおどかしたり、おどかされたりすることは、りくつからいえばおかしな話です。そんな目でみると、このげきはうそとしか思えないでしょう。けれども、このげきでは、お面を人の心の表われだと思えばよいのです。悪太郎が、さきほど言ったような――いばったり、じまんばかりしたり、人をいじめたりする人間になっているのだと考えると、このげきを作った作者の気持がはっきりうかびあがってくるでしょう。

面をつけた悪太郎に、村の男はふるえあがります。おもちゃ屋は思うままになぶられます。このことから私はつぎのようなことを考えます。

世の中には、いばっている人にあうとすぐぺこぺこするひくつな人がいます。強そうなかっこうをした者が現われると、言

いたいことも言えないで、だまってしまう人があります。こんな時にも自分を失わないで、相手をしっかり見定めることがだいじです。あんがい、悪太郎のように紙のお面をつけているかもわかりませんから……。

さて、悪太郎はねむっている間におたふくの面ととりかえられます。それを知らないで、通りがかりの村の子供をおどしにかかりますが、子供たちは声を立ててわらいます。そこで悪太郎は、はてこんなはずではなかったとあわてます。ちょうど、本当のことを見ぬかれながら、それとは知らないで、ありもしないことをじまんし続けているようなものです。

げきとして、おもしろいところです。

このげきのことばは、おとなの使うもの、ふつうには使わない古い調子のもの、いなからしいものがいろいろまじっています。(「へっ、源五郎と申します。どうぞお助けを……」「弱虫め、こうしてくれる」「こりゃ、まて」)また、長いひとりごともあります。(まくあきの悪太郎のせりふ)

こんなことばづかいやひとりごとは、新しい劇には見あたらないもので、きょうげんやかぶきなどに残されているものです。

「悪太郎の面」は、きょうげんの形をまねたものです。

従って声の調子も、ふつうのげきよりもゆったりと大きくした方がぴったりします。

村の男や旅のおもちゃ屋など、おとなの役がありますが、声の出し方はむりに作ったり、おとなのこわ色を変にまねたりし

ないで、声の調子の中に、いくぶんおとならしさを出せばよいのです。
動きもできるだけせりふと同じ気持で、ゆったり大きくしてください。たとえば、最後の「さあ、てんぐをつかまえろ」「おたふくをつかまえろ」など、うでをまくったり、はちまきをしめたり、ぼうぎれを持つ手につばきをつけたり——ふつうのげきですと、すぐとびかかってつかまえるところでしょうが、この場合は、たっぷり大きくしぐさをしてください。(ただ、だいじなことは、いかにもしばいだといった気持で、いい気になったり、ふざけたりしないことです。)

○ぶ台

ぶ台の中央に木のみきを立ててください。木のみきや葉っぱ、草むらなどを、もようのようにした方がおもしろいでしょう。
草むらは、中央の木を中心に同じかんかくである方がこのげきのぶ台として似あうでしょう。

○衣しょうと顔

悪太郎はお寺の子ですから白い着物にします。(これですと、てんぐの面にもおたふくの面にもあいます。)
その外は、村の男、たきぎとり、旅の男ですから、それぞれくふうしてください。村の男は古いむぎわらぼうし、旅のおもちゃ屋はずきんなどかぶると感じがでます。
おとなの顔は、まゆを太く、鼻から口のわきにかけて八の字

のしわなど、すみで書きこむくらいでいいでしょう。

○そのほか

出る人は、せの高い人低い人、やせた人ふとった人――いろいろな型の人が集まってください。

お昼の時間に野外げきとしてやってもおもしろいと思います。

四　文明のあけぼの

あたたかい午後の日光がいっぱいにさしこんでいるざしきです。庭のうめは今がまっさかりで、光にとけてよいかおりがただよってきます。

　山田君のおとうさんから、この前の続きのお話を聞きに、私たちは、日曜日の午後、山田君の家に集まりました。

　山田君のおとうさんは大学の先生で、古い時代のことをよく調べていらっしゃるのです。めずらしい土器や、むかしの道具をいろいろ集めておられ、本や地図や写真や絵などもたくさん持っておいでです。

「この前はどこまで話しましたかな。」
と、山田君のおとうさんがおっしゃると、高木さんはノートを開いて、
「土器や石器のつぎに銅器が使われだしたところです。」
「そうでしたね。
きょうは少し話がむずかしくなるかもしれません。わかりにくかったら、どんどん質問してください。」
と、テーブルの上に地図をひろげられました。

文明はどこに始まったか

山や野を走りまわって鳥やけものをとったり、海や川へ出て貝や魚をとって生活していた人間は、やがて牧ちくや農業を始

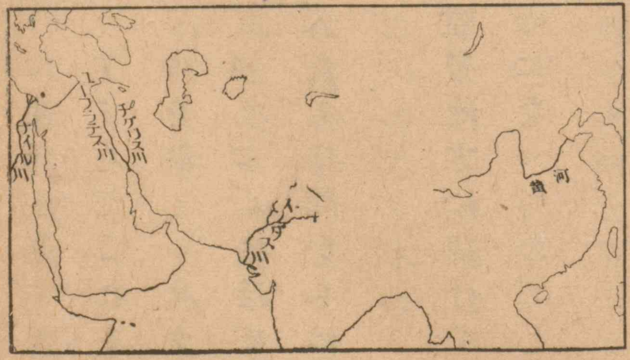
め、食物を豊かに得るようになりました。その結果地上に住む人間の数はしだいに多くなりました。人間は一定の場所にかたまって住むようになり、そこに人類の文明が開け始めたのです。

この地図をごらんなさい。

ナイル川、チグリス、ユーフラテスの両川、インダス川、黄河などの流域がその場所で、世界でいちばん古く文明が開けたところです。

ここでみなさんはどんなことに気づきますか。

人類の文明が、みな温帯地方を中心とした川の流域に開けていることがわかるでし

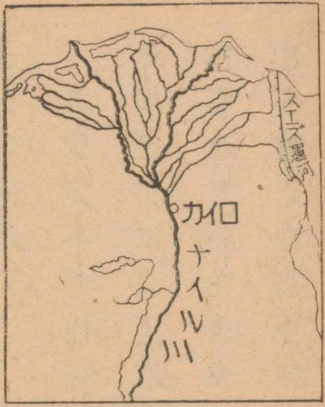


よう。熱帯地方に住んでいた人たちは、あまりに生活が楽すぎました。人々はただ食べものを集めるだけで、すすんでこれを作り出そうとはしませんでした。あせを流して畑を耕し、麦やまめをまかないでも、自然にできる物だけでじゅうぶん生活できました。ですから、楽な生活を送っていた人たちの間からは、どこからも文明は生まれてきませんでした。

さて、このように人類の文明は、主として温帯地方に開けてきたのですが、では、どうして川の流域が中心になったのでしょうか。

例をエジプトにとって、そのわけを考えてみましょう。

ナイル川の流域に開けたエジプトの文明は、世界でもいちばん古いものの一つに考えられていますが、この川の地域は、さ



ばくで囲まれており、北の方は海で、ちょうど細長い島のような所です。ですから、他の人類のなかまからせめられることもなく、安全に自分たちの生活と文明を育てていくことができたのです。

しかも、人間が生活していく上にたいせつな水には不自由せず、また、毎年四月から六月にわたって起こるこの川のこう水は、流域の土地を豊かに肥やしました。そのために農作物はよく実り、多くの人を養うことができたのです。川はまた、人間の交通に便利な道ともなりました。中国人が道路のことを「かわいた道」とよび、川を「しめった道」といっているくらいです。これも、川を中心として人類の文明が開けてきた、一つの理由です。

大むかしの文明　その一

このようにして、川の流域に初めて人類の文明らしい文明が開けてきたのですが、それがどのくらいのところまで進んでいたかを、少し話してみましょう。

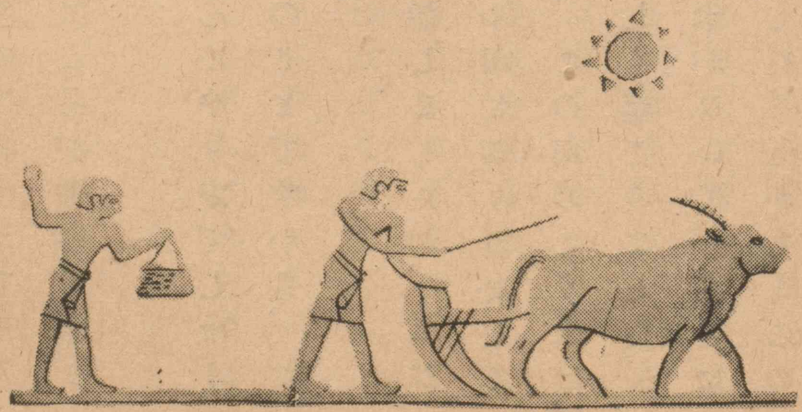
まず、ナイル川の流域におけるエジプトの農業から始めましょう。

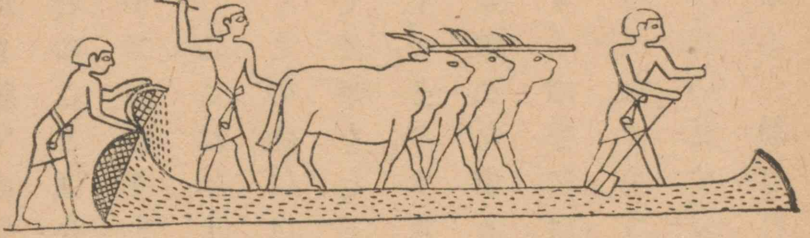
エジプトで作られた作物は、おもに小麦や大麦などでしたが、そのほかに、えんどうやそらまめやたまねぎやだいこんなども作られていたようです。また、着物を作るために、あまや綿なども植えたようです。エジプトの農業で進んでいたことは、土

地を耕すのに家ちくを使ったことです。このことは今に残っている当時の絵によってわかります。

ここに二まいの絵があります。

この絵には、ふたりのエジプト人が畑で仕事をしているところが書かれています。そのうちのひとりは、一頭の牛に一つのからすきをつけて地面を耕しています。右手にはむちを持って牛を追い、左手ではからすきをにぎってそれをあやつっています。もうひとりの男は、その後から、耕された地面に種をまいています。





また、別の絵には、三頭の牛を使って三人の男が麦打ちをしているところが書いてあります。

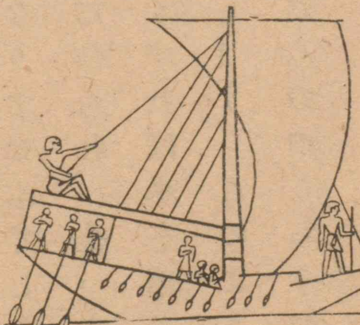
どうです。なかなか進んだやり方でしょう。これが今から数千年も前のことですから、おどろくではありませんか。

さて、前にもちょっと話しましたが、エジプトの農業といえばナイル川と切りはなして考えることはできません。この川のこう水は、来る年も来る年も規則正しく起こりました。そして二、三か月すると水がひいて、あとに肥えた土を残していきました。しかし、この

ようなこう水を、エジプト人が本当に自分たちのために役だたせるには、数百年もの長い年月がかかりました。なぜなら、このこう水をうまく使って、広い川の流域をうるおすには、いく千いく万の人間が力をあわせて働かなければならなかったからです。エジプトは雨の少ない土地なので、農業をするためには、大きなあなをほってこのこう水の水をためたり、井戸をほってくみ上げたりして、土地をうるおさなければなりませんでした。だんだん後になって、この水ためはほうぼうに作られ、長い水路がそこから引かれるようになりました。こうすれば水を運ぶ必要がなくなるからです。よく考えたものでしょう。このようにして、やがてエジプトには、数知れぬたくさんのほりわりや水路が、あみの目のように作られました。

川の国エジプトの交通はほとんど船によりました。それは、葦（あし）をかたくしばり、その上に、にかわや、まつやになどをぬりつけたもので、軽くて便利なかわりに、ながく使うことができませんでした。それでせいぜい、川の両岸の行き来や、ぬまなどにうかべて鳥や魚をとる時に使われていたようです。ナイル川を上ったり下ったりするのには、やはり木で作った船が使われました。木の船といっても、たいして大きいものではなく、せいぜい三十メートルくらいなものだったろうと伝えられています。

これらの船は、帆をかけることも、かいでこぐこともできるようになっていました。



この絵は、エジプト人がえがいたもので、帆船の絵はこれ一つしかありません。帆には、ふつうもめんの布やリンネルなどが使われていたようですが、中には、なめし皮の帆をかけた船もあったとのことです。

つぎに、エジプト人が、すばらしい技術を持っていたことを話しましょう。

その一つはガラスを作ったことです。ガラスというと、みなさんは、近代になって発明されたもののように思っているかもしれませんが、このころにもう作られていたのです。

ナイル川のそばからは、非常にたくさんのガラスのさらや、

花びんなどがほり出されました。もちろん今のものに比べればおとったものですが、けものや鳥の形をたくみにこしらえているところなどは、なかなかみごとなものです。

ガラスのほかに、銅や青銅で作られたおのや、つちや、やりさきや、つぼや、さらなども発見されました。これらは、いま、世界各地の博物館におさめられています。金もさかんに使われ、うすいはくとして、ものの上にかぶせたり、かざりにされたりしました。

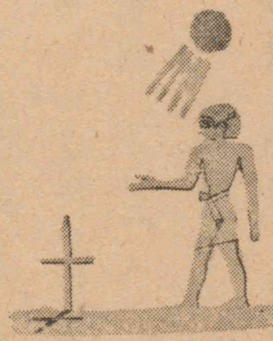
エジプトといえば、だれでもピラミッドのことが頭にうかぶでしょう。これは、この国の王様たちのミイラとなったからだを、永く保存するために建てられた石の墓です。はじめは、土や石の小さいものにすぎなかったのですが、後にはだんだん大

きくなり、数千数万という人を使い何年間もかかって作られるようになりました。今残っているものでいちばん大きいのは、クフという王様の時代に建てられたもので、「大ピラミッド」とよばれています。高さ一三七メートル、建てつぼ五・二七八ヘクタールもあるということです。

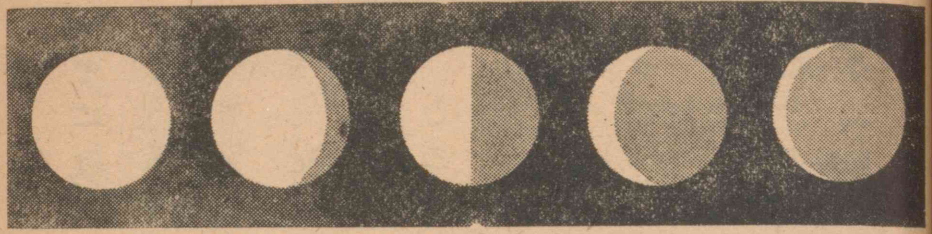
大むかしの文明　その二

だいぶ長くなりましたが、もう少し話を続けましょう。

エジプトの文明でわすれてならないことは、科学の芽ばえが現われ始めていることです。時間を計る道具――時計を使ったことがその一つです。時計といっても私たちがいま使っているようなものではありません。もののかげで時間を計る日時計です。太陽は私たちの祖先が時間を計った、いちばん古い自然の道具でした。太陽が東の空に上ると一日が始まり、西にしずめば一日が終るのでした。しかし、これはあまりにもおおざっぱな時計でした。朝と夜との二つしかわからない時計です。



エジプトの人は、木のかげの長さが時をあらわしていることに気がつくようになりました。そして日時計を作りました。そ



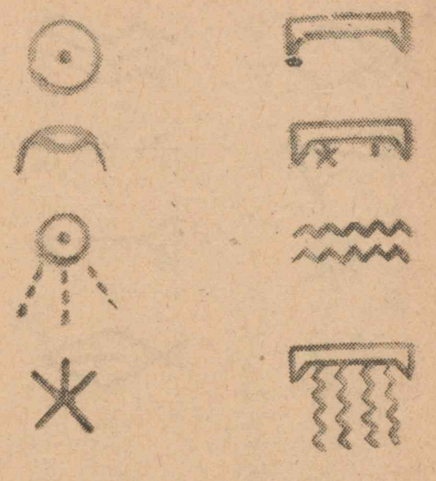
れは、十字のぼうを立て、そのかげの長さで時間を計るしくみですが、一日を二十四に分けたところなどは、今の時計の土台となっているわけです。

もう一つは、こよみが作られたことです。

エジプトの人は、夜空にかかる月が、ある時はまるく、それがだんだんかけて細くなることに気づきました。二十九日か三十日目に一度まんまるくなること。そのまんまるの月が、ナイル川のこう水からこう水までに十二回出ることを発見しました。そこで、エジプトの人は、この間を一年とし、それを十二に分けることにしました。このようにして、一年が十二か月となったわけです。しかし、こまったこ

とには、月をもとにしたこよみでは、一年三百五十四日となって、本当の一年はそれより長かったのです。そこで、毎月を三十日とし、一年を三百六十日にして、残りの五日はこれを「祭日」とよぶことにしました。こうして、一年三百六十五日のこよみは、エジプトの人によって作られるに至ったのです。

　このほか、エジプトの人たちが発明したものに紙があります。ナイル川の流れを中心として、近くにたくさんのぬま地が散らばっていますが、そこにパピラスという水草が一面においしげっています。燈心草によく似た植物で、高さは、三メートルにもなるもので、このくさを長くうすくさき、つなぎ合わせて水にひたし、大きい一まいの紙にしたのです。かわくと黄色になりましたが、エジプトの人はこの紙に文字を書いたのです。そ



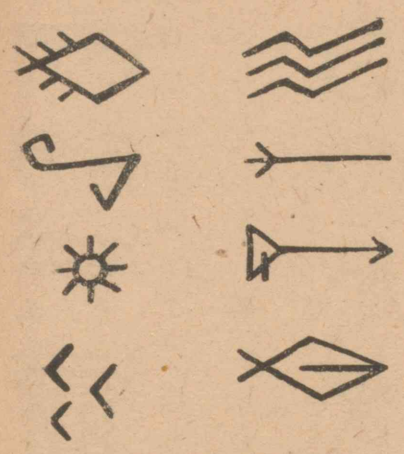
れには、葦の先をとがらしたペンと、すすを植物のしるでこねたインクが使われました。ペーパー（紙）という英語はこのパピラスから出たことばです。

　エジプトの人たちが書いた文字は、いったいどんな文字だったでしょうか。残念なことに、この国の最初の文字は、あとかたもなくほろんでしまって、知られておりませんが、学者たちはずっと後になって使われた文字を、わずかに発見することができました。それは、このような絵文字です。

　人間が初めて作った文字は、かんたんな絵にすぎませんでした。　一つ一つをよく見てごらんなさい。エジプトの人たちが作

った絵文字が、なるほどとわかってくるでしょう。　絵は人間のだれにでもよくわかる文字なのです。

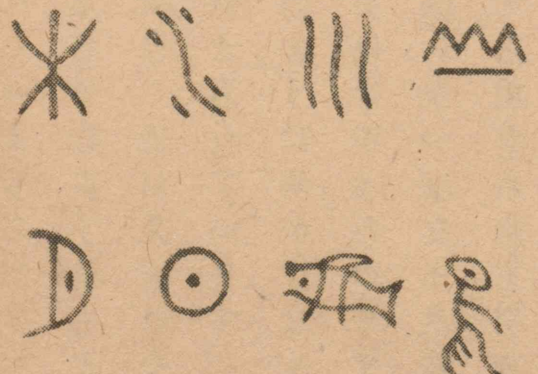
　絵文字の話が出ましたから、メソポタミア文明のなかに生まれた絵文字のことについて少し話しましょう。メソポタミアというのは、前に話したチグリス、ユーフラテス両川の流域の土地のことです。ここの絵文字で、今まで残っているのは八つです。これらもエジプトの絵文字のように、だれにもよくわかるものです。



　よく見てください。どれもこれもよくできているではありませんか。エジプトの絵文字とメソポタミアの絵文字の「水」という字のよく似ているところなどおもしろいでしょう。私たちの使っている漢字のなかにも、これと似たものがあります。比べてみると、「日」「水」などはとてもよく似ています。

　エジプトに文明が開けてきたころ、アラビアの北東にあるこのメソポタミアにも、それにおとらぬ文明が築かれていました。今では、この二つの川はペルシャわんに注ぐ前に一つに合していますが、そのころは、まだ別々に海に流れこんでいました。

　文字も発明されていましたし、銅や青



銅でいろいろな道具が作られていました。すべての大むかしの文明がそうであったように、この土地の文明も農業から始まり、他に見られないほど進んだものだったと伝えられています。

メソポタミアもエジプトのように雨が少なく、農業にはあまりよいところではなかったのですが、メソポタミアの人たちは、りっぱな土木技術を持っていて、ユーフラテス川から水を引きこみ、かわいた土地をうるおし、また土手を築いてこう水を防いだりしました。そのために大麦や小麦がたくさんとれました。

メソポタミアでは、土地を耕すのにこの絵の

ような農具が発明されていました。これは「たねまき機」といわれていましたが、この農具は土地を耕すのと、種をまくのとをいっしょにできる便利なものでした。絵で見ると、三人の人がついています。ひとりは牛を追う役をし、後のひとりは機具をあやつる役をし、まん中のもうひとりは、じょろのような口から種をいれる役をつとめています。牛が進むと、地面が耕され、その後にすぐ種をまくというぐあいになっているのです。ずいぶんよくできているでしょう。

このようにして、川の流域を中心として開けてきた人類の文明を、いろいろな道具の材料からみると、銅と青銅とでありました。もちろん、前に話したようないろいろな土器や石器も、

長い間入りまじって使われていましたが、このころから、ぼつぼつ鉄が姿を現わし始めていることは見のがしてはならないことです。

ピラミッドの石のつぎ目から発見された鉄のナイフや、そのころの寺のかべにえがかれた人間の道具に、時々、青色をぬったもののあるのは、みなこのしょうこです。なぜなら、青色をした道具――それは鉄としか考えられないものだからです。しかし、エジプトの人は自分たちで鉄を作り出したのではなく、ほかの土地から買ってきたものだろうとされています。

このように、石器は銅や青銅の道具のなかに残りながら、時がたつにつれて、しだいにその姿を消していきましたが、銅や青銅もまただんだんと鉄に追われて、その姿をひそめていきま

した。それは、ちょうどどろ水の一ぱいになっている池の一方の口からきれいな水を流しこむと、いつの間にかどろ水がなくなってしまうのとよく似ています。文明はこのようにして、青銅時代からしだいに鉄器時代へと進んでいきました。

人間と人間、人間のなかまとなかまとの争いがはげしくなっていった時代ですから、銅や青銅で作ったものよりも、固くてするどい鉄の方が、力をもつようになったことは、あたりまえのことといえましょう。それで、青銅時代は、わずかに千三百年ぐらいで、つぎの鉄器時代へと変わっていったと考えられています。この時代以後、すぐれた人間のなかまといわれる民族の、ほとんどすべては、いつも、相手よりまさった鉄器を持っていたことが知られています。それが、やがて私たちがいろい

ろな文明の利器といわれるものを持つようになった初めてです。

現代もある意味では鉄の時代とよんでもいいくらいです。なぜなら、鉄を自由に私たち人間が使えるようになったのは、ほんのここ数百年ほど前からのことだからです。このように鉄器時代のあけぼのは、やがて現代につながっているのです。前に話した文字の発明や、文字によって伝えられたいろいろな話によって、人類の歴史もまたようやく現代とつながる書かれた歴史へと、その歩みを進めてきたのであります。

文明の始まりのころのようすは以上の通りです。

しかし、これまで話してきた人類の歴史から現代に至るには、まだこの間に二千年もの歴史があります。この二千年の間に、人間はそれまでの経験や知識をもとにして、今日のようなすば

らしい文明を築きあげたのです。ですから、この二千年の歴史を調べることは、私たちにとってたいせつなことでありますが、そのためには、このような文明のあけぼのにまでさかのぼって、大むかしの歴史を知ることがたいせつです。なにごとによらずものの始まりにこそ、そのものの姿がよく現われているからです。人類が文明を築いてきた道は、また、これから私たちが新しい文明を築いていこうとする道を見きわめる上に、役だつのです。それは、人間が自然の石や木から道具を作り出して、一歩一歩きり開いてきた道です。いいかえれば、仕事と道具をくふうしてきた道であり、働く者の道です。仕事こそは、人類の文明を進めていく原動力なのです。みなさんは、人類の新しい歴史を作るだいじな人たちです。むかしのこと、今のことをよ

く調べ、そこからさらに一歩進んだ新しい文明を作り出してい
くように努力しましょう。

○話を聞く時には、話の要点をよく書きとめましょう。この話の要点も書き出してごらんなさい。

○春休みには、博物館を見学したり、歴史の本を読んだり、歴史の話を聞いたりして、人類の文明のあとをたずねてみましょう。

ことばの表

○あおばみ(あおばむ)……一五
あかはた……四二
あくたろう……四七
あくび……五六
あけぼの……九六
あし……八二
あたって(あたる)……三八
あっけ(に)……六一
あなぐら……三三
あま……七八
あやつって(あやつる)……七九
あらた(に)……一七
あらて……五一
ありもしない……六八
アルバム……三三
あんがい……六八
○イースター……一五
いいかえれば(いいかえる)……九七
イエス・キリスト……二三
いか……二六
いきいき(と)……四
いご……九五
いじめて(いじめる)……六六
いじゅう……一八
いしょう……七一
いだい……一九
いっか……二三
いつつ……三九
いってい……七五
いつになく……三六
いっぽ……九七
いど……八一
いれちがい(に)……六一
いろり……三八
インク……八九
インダスがわ……七五
○うけとって(うけとる)……四五
うしろむき……六四
うでまえ……四三
うでまくり……五九
うなる……二
うばいあう……三一
うまごや……二三
うまのり……五三
うもれた(うもれる)……二〇
うろうろ……六六
○えいじしんぶん……三
エジプト……七六
えもじ……八九
えんどう……七八
○おいはぎ……四八
おいばね……六
おおかみ……四八
おおげさ(な)……六三
おおごえ……五一
おおざっぱ……八六
おおむぎ……七八
おおわらい……一〇
おろかもの……六六
おくないたいいくしつ……四一
おさとう……一五
おそるおそる……五六
おたすけ……五〇
おたふく……六一
おどし……六八
おとった(おとる)……八四
おの……八四
おはかまいり……一七
おぼん……一七
おまいり……一七
おめでとう……八
おめん……二
オルガン……二九
おんじん……一九
おんたい……七五
○かい……八二
かいかい……四三
がいこくぼうえき……三
かいさん……四五
がいしゅつ……八
かいぞく……二
かおり……七三
かきこむ……七二
かぎって(かぎる)……二
がくたい……一九
かくち……八四
かずしれぬ……八二
かた……七二

かたごし……五四
かちく……七九
かっさい……四五
かなでて(かなでる)……一六
かならずしも……二七
かびん……八四
かぶき……六九
かみ……一九
かみて……四九
からすき……七九
かわいた(かわく)……七九
かんかく……七一
がんじつ……一四
かんしゃさい……三
かんだかく(かんだかい)……二九
○きおく……一七
きかい……四一
きぎ……三〇
きぐ……九三
ぎじゅつ……八三
きたえた(きたえる)……四三
きずいて(きずく)……九二
きづいて(きづく)……六一
きねんび……一七
きみ……二
きも……四八
きょうげん……六九
きょくせん……三七
きりはなして(きりはなす)八〇
ぎんこう……一四
○くさり……三三
くさめ……五一
くしん……一五
くだもの……三三
クフ……八五
くみわけ……四一
くもり……三五
クリスマス……三三
クリスマスツリー……三三
くりぬいて(くりぬく)……二〇
ぐんがくたい……一六
○ケーキ……一五
けいけん……九七
けっしょうせん……四二
けんこく……一四
げんごろう……四七
げんだい……九六
げんどうりょく……九八
けんびきょう……二七
○コース……三三
コート……二四
こうか……四五
こうが……七五
こうかい……一六
こうずい……七七
こきゅう……四
こぐ……八三
こぞう……四八
こっか……一九
こっき……一九
ごねんし……四
こひきだし……八
ごみばこ……三
こよみ……八七
こらえきれず(こらえる)……八三
こらして(こらす)……六〇
ころがして(ころがす)……一六
こわいろ……六九
こわく(こわい)……三六
こわごわ……五五
○さいきん……二八
さいじつ……八八
サイダー……三三
さいばい……四六
さかのぼって(さかのぼる)九七
さき(さく)……八八
さくしゃ……六七
さくらんぼう……一五
ささやく……六〇
さしだされた(さしだす)……五四
さばく……七六
さゆう……四八
サンクスギビング……三
サンタクロース……二四
○しいく……四六
ジェファソン……一七
しかけはなび……八
しぎょう……二九
しぐさ……七〇
しくみ……八七
じごく……三〇
じざい……三七
しせい……三五
しそう(な)……六〇
しつもん……七四
しどう……四二
しばり(しばる)……八三
しみとおる……三九
しみん……一六
しもて……四九
しょうこんさい……一七
しょうじき……一五
じょうたい……二八
じょうたつ……三四

じょうりく……三
じょろ……九三
しょさい……二
しょもつ……四六
しゃせい……三
ジャンプ……三六
しゅうかく……三
しゅうごう……四三
しゅくさいじつ……三
しゅくふく……一九
しゅっぱん……二八
しゅっぱつせん……四二
しゅんかしゅうとう……三
しりごみ……三三
しりもち……三三
しる……八九
しろぐみ……四一
しわ……七二
しん(と)……二九
じんこうてき……二八
しんねんかい……五
○すいじょうき……二六
すいぶん……二六
すいろ……八一
すう――……八〇
ずかい……四〇
スキークラブ……四一
ずきん……七一
すつぽり……六三
スピード……三六
ずりあげ(ずりあげる)……五六
スロープ……三三
○せいきょうと……三
せいこう……二八
せおって(せおう)……四九
せいどう……八四
せいぶ……一八
せつうん……三六
せっかずふ……二八
せっき……七四
せのび……六一
せんげんしょ……一七
ぜんせいどうかいてん……三四
○そうとう……三四
そせん……一五
そらまめ……七八
そらもよう……四五
そり……二四
○たいかい……四二
たいそう……四三
だいたん……三七
たかだい……五
たずねました(たずねる)……八
たちふさがる……六一
たっぷり……七〇
たてつぼ……八五
たにぞい……三〇
たね……七九
たねまきき……九三
――だの……一六
たま……三五
たまえ(よ)……六
たまねぎ……七八
たむら(くん)……三
だんじよ……四一
○チグリス……七五
ちしき……九七
ちちのひ……一九
ちゅうおう……四八
ちゅうごくじん……七
ちょうじょう……三七
ちょっかっこう……三三
ちらばって(ちらばる)……八八
○つえ……三三
つかみどころ……六六
つきもの……三
つち……八四
つなぎあわせて(つなぎあわせる)……八八
つぶす……四八
つめたくて(つめたい)……三九
つめよる……六四
○テーブル……七
ていれほう……四一
てっきじだい……九五
てらされた(てらされる)……四
てんぐ……四八
○ど(のすぎた)……二
どいとしつら……二八
――とう……七九
どうき……七四
とうしんそう……八八
どうにか……四四
とうぶ……六
とうもろこし……三〇
どうやら……三六
とおりすがり……四八
とがらした(とがらす)……八九
どき……七三
どきょう……三七
どくりつ……一七
どだい……八七
となかい……二四
どぼく……九二

ともすると……三六
トランプ……八
とりかこむ……六三
○ナイフ……九四
ナイルがわ……七五
なかたにうきちろうはかせ……二八
なかやませんせい……三二
なかよし……三二
なきべそ……六六
なげすてて（なげすてる）……六一
なにごと……九七
ナプキン……一五
なぶられます（なぶる）……六七
なめしがわ……八三
なり……二二
なるほど……四八
○にがて……九
にかわ……八二
にせ……五九
にほんざくら……一五
ニューイングランド……三
○ぬきあし……五九
ぬの……八三
ぬま……八二
○ねかた……五二
ねかぶ……三〇
ねったい……七六
ねむりこけて（ねむりこける）……五九
ねんちゅうぎょうじ……三
○のうぐ……九三
のびあがつて（のびあがる）……四九
○パイ……三
ばか（に）……四三
はく……八四
はぐろさん……五〇
バケツ……一四
はた……四四
はちまき……五九
はなび……一八
ははのひ……一九
ばばぬき……八
パピラス……八八
はやしたてる……六五
はりあげて（はりあげる）……一九
はるのきょく……一六
ハロウィンさい……二〇
はんせい……四六
はんせいどうかいてん……三四
パンチ……一七
○ヒェッ……五二
ひきむしられる（ひきむしる）……六六
ひきよせ（ひきよせる）……五四
ひくつ……六七
ひごろ……四三
ひそませて（ひそむ）……五八
ぴったり……六九
ひどけい……八六
ひとひら……四六
ひとめぐり……四八
ひとやすみ……三八
ひめい……五一
ひょうてん……二六
ひらた（さん）……四五
ピラミッド……八四
ピント……五
○ぶき……九五
ふくわらい……九
ぶちょう……四一
ぶっそう……四八
ふり……五四
ふりわけにもつ……五三
ふるえあがる……六七
ふんすい……一六
ぶんめい……七四
○ペーパー……八九
ヘクタール……八五
ぺこぺこ……六七
へた……三二
ベツレヘム……三二
ペルシャわん……九一
ペン……八九
ベントレー……二七
○ポトマックがわ……一五
ぼうぎれ……五六
ほうりだして（ほうりだす）……四九
ほぶね……八三
ほそながい……七
ほぞん……八四
ぽたぽた……三五
ぽっ（と）……一八
ぽっぽ（と）……三四
ほりわり……八一
ほろばしゃ……一八
ほろんで（ほろぶ）……八九
ホワイト・ハウス……一六
○まさかり……一五
まさった（まさる）……九六
まずしい……二三
まじよ……二〇
まちこがれます（まちこがれる）……二三
まつさかり……七三

まつやに……八二
まゆ……七一
○ミイラ……八四
みがまえて（みがまえる）……五二
みきわめる……九七
みさだめる……六六
みずくさ……八八
みずたま……二六
みなみれいこ（さん）……五
みなれない（みなれる）……三六
みぬかれ（ながら）……六八
みのがして（みのがす）……九四
みぶるい……五七
みんぞく……九五
○むぎうち……八〇
むしめがね……四六
むち……七九
むらはずれ……四七
○めじるし……四二
メソポタミア……九〇
めばえ……八六
○もたげて（もたげる）……五四
もちろん……八四
もってこい……四三
もはん……四五
もめん……八三
○やせた（やせる）……七二
やなぎ……一五
やみ……一八
やりかた……五一
やりさき……八四
○ユーフラテス……七五
ゆうばえ……三五
ゆきき……八二
ゆきげしき……三
ゆるやか（な）……三三
○よきょう……四五
よごれて（よごれる）……三六
よしこ……六
よびりん……九
○りき……九六
りくかいぐん……一七
りくせんたい……一七
りくつ……六七
りす……三〇
りゅう……七七
りゅういき……七五
りょうがわ……一八
りょうがん……八二
りょうしん……三
りょうひじ……五二
リンネル……八三
○れいど……二六
レモン……一七
○ろうそく……二〇
ろうどうさい……二〇
○わかもの……四七
わらいもの……六〇

漢字の表

眼 5　（映）6　貿 12　易 12　祭 13　祖 15　軍 16　（魂）17　独 17

宣 17　（偉）19　恩 19　過 21　収 22　貧 23　（晶）26　版 28　功 28

（滑）33　（降）33　（姿）33　制 34　在 37　導 41　賛 41　印 42　興 45

散 45　型 46　（源）47　（羽）50　悲 51　（域）75　肥 77　（帆）82　存 87

至 96　識 97

小国 523

Copyright 1950, by
The Kyōiku Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

五年生の国語　下

Approved by Ministry of Education
(Date　　　1950)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。なお、規則や指示にしたがつて多少加除訂正のやむをえなかつたことについて御諒解をお願いいたします。

アメリカの年中行事……　坂西　志保
雪が積もる………丸山　薫
子供しばい………栗原　一登
文明はどこに始まったか、大むかしの文明…北野　道彦

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財團法人 教育図書研究会

理事長　東京高等師範学校教授　佐藤保太郎
担当執筆者　東京高等師範学校教諭　田中豊太郎
〃　花田哲幸
〃　青木幹勇
〃　森下巖
〃　小島忠治

表紙　田原輝夫　**さしえ**　大槻定雄

印刷　昭和二十五年　月　日
発行　昭和二十五年　月　日
定価　円

著作者　財團法人 教育図書研究会
会長　務台理作

発行者　学校図書株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

印刷者　図書印刷株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

發行所　学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる。

広島大学図書
0130449748

おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。